

王さまらしくもなく二まい舌をつかって、「あの子はだれにもやることはできない。」と、おこりにおこって、こうおっしゃいました。しかし王子は、そんなうそつきの王さまには相手にならないで、三人の家来に言いふくめて、王さまのすきをねらって、王女をかかえさせて、おいそぎで、ごてんを出てしまいました。王さまは、ふと見ると王女がいつの間にか、いなくなっているものですから、「おや、たいへんだ。あの四人のものが、さらっていったにちがいない。追っかけてうばいかえしてこい。さあ早く早く。」とまっ赤になって命令されました。すると王さまの兵隊は、「そらいけ。」と言うが早いか、何千人という大人数が、一どに馬にとびのって、大風のように、ビュービューかけだしました。王子たちは王女の手を引いて、遠くまでにげて来ました。するとやがて後ろの方で、パカパカと大きななひづめの音が聞こえ出しました。王子は走りながら、「おいおい、何だろう。」と三人の家来に言いました。「おや、兵隊のようですよ。ああ、兵隊だ、兵隊だ。馬に乗った兵隊が大風のように、とんで来ます。」火の目小ぞうは後ろを見るなり、こう